

1 向田邦子という女性像

1 【自己の発見】

(参照 講談社文庫 向田邦子『夜中の薔薇』『手袋をさがす』)

2 【自己暗示の坐禅】

(参照 講談社文庫 向田邦子『眠る盃』『ハックの心理学』)

3 【理想と現実】

(参照 文春文庫 向田邦子『無名仮名人名簿』『コロンブス』)

4 【恋文】

(参照 新潮文庫 向田邦子『向田邦子の恋文』)

II 阿久悠の描いた女性像

5 【はかなさの意味】——白い蝶のサンバー

本来、恋とは、華やかであるはずのものなのであるが、日本では、そういうイメージでは恋は存在していないのだ。恋は人間を肥らせ成長させるものでなく、やせさせ、傷つけるものとして生きている。恋は栄養ではなくヒ素のようなものというのが、日本人の恋感覚なのである。だから、どうしても真正面から恋にとり組んだ歌というのは陰湿におちいりやすい。愁嘆場、修羅場である。だから、この場合、どうしても、恋とガブリ四つの歌はやめたかったのである。

(岩波現代文庫 阿久悠『作詞入門』)



6 【大きな愛】——あの鐘を鳴らすのはあなた

二〇二三年、大きな和田アキ子を小さく見せようと仕組んでき、女であることを強調してきたが、ここで、大きくなれるだけ大きくしようと考えたのである。果たして、女性歌手はどこまで大きなテーマ、どこまで大きな曲を歌うことができるのか、そういうスケールの限界に挑戦したものである。

詞の内容も、男と女の一对一の感情の動きみたいなのはやめて、人間、そして、青年に対して、どこまで期待をするかという、大きな愛をテーマにしてみたのである。

あなたに逢えてよかった あなたには希望の匂いがする

“あなた”とは何も特定の人物ではない。本来のやさしさを備えた人間なのである。

(岩波現代文庫 阿久悠『作詞入門』)

7 【虚無からの出発】——時の過ぎゆくままに

昭和五十年、日本もぼちぼち贅沢になりつつあった。贅沢は物を手に入れることではなく、男と女の愛の中にけだるさなどという要素が入り込んで来るようになったことで、ぼくにとっては面白い時代であった。大体、

怨念や情念は苦手の方で、虚無的な人間が一瞬虚無を忘れて愛に溺れ、熱が冷めるとやはり虚無の中にあると一つのが好きだった。

(中略) ラストシーンで、この世ですがるものは時効待ちの三億田だけという青年が歌うと、けだるくもあるが、せつなくもあった。まさに時代の感じがして、ぼくは、いいものにめぐり逢ったという気持ちになった。「墮ちる」という言葉を変えてくれと、プロダクションからいわれたが、ぼくは頑張った。墮ちる歌なのである。

(岩波新書 阿久悠『愛すべき名歌たち』)

III 秋元康の描く女性像

8 【昭和の終焉】—川の流れるように—

「川の流れるように」は平成になって間もなく発売され、美空ひばり最後のヒット、そして、遺作となった。彼女を歌っているようであり、昭和という時代を語っているようであり、とするなら、「ここぞ言つ」「故郷」は何をさすのだろうかと思つた。故郷とは、単に生まれ育ったところという意味でないに違いない。(中略)美空ひばりは、平成になってすぐに死んだ。しかし、どう考えても昭和の終わりに、としか思えない。それほど、戦後と美空ひばりは一体化しているところがあった。「川の流れるように」は、昭和を送る歌なのか、昭和に贈る歌なのか、ふと考える。

(岩波新書 阿久悠『愛すべき名歌たち』)

9 【女性の行動力】

(参照 NHK出版生活人新書 秋元康『趣味力』)

参考資料

白い蝶のサンバ (1970) 作詞 阿久悠 作曲 井上かつお 歌 森山加代子

<http://j-lyric.net/artist/a0028c5/100447c.html>

あの鐘を鳴らすのはあなた(1972) 作詞 阿久悠 作曲 森田公一 歌 和田アキ子

<http://j-lyric.net/artist/a000576/10057ad.html>

時の過ぎゆくままに (1975) 作詞 阿久悠 作曲 大野克己 歌 沢田研二

<http://j-lyric.net/artist/a000aa6/10057c0.html>

川の流れるように(1989) 作詞 秋元康 作曲 見岳章 歌 美空ひばり

<http://j-lyric.net/artist/a000977/1001189.html>

恋するフォーチュンクッキー (2014) 作詞 秋元康 作曲 伊藤心太郎 歌 AKB48

<http://j-lyric.net/artist/a04cb7c/102e06a.html>